



クラシックが流れる「新宿らんぶる」。昔は客のリクエストでレコードをかけてもいた

■新宿らんぶる  
03(3352)3361

# 大人がくつろげる空間

新宿駅東口は中央通りの老舗喫茶「名曲・珈琲 新宿らんぶる」を訪ねた。天井の高い地下のフロア、クラシック音楽が流れる上品な空間が広がっている。小説では店名こそ記されていない



## 彩菜の悩みに「師匠」が一言

■喫茶「名曲・珈琲 新宿らんぶる」

午前5時、JR山手線は始発がもう動いている。

小説で夜行バスを降りた志穂は、利一を待つ間に駅のトイレで美しく身だしなみを整えた。私は

といえば、道中の快眠を優先させるあまり、ほぼ部屋着といった格好でバスに乗り込んでいた。少し事情が違うが、取りあえず歩きやすい靴と夏用のシャツに着替える。

いが、押しかけ相談にきた彩菜に、レッスンを付けているミュージシャンの江崎が穏やかにたきつけた

作中では床に淡い緑のじゅうた

店がこたという。

「はしごを下りて、星を見上げて楽しくやってみるか？ 根性据えてプロになって、星をつかみにいくか？」

話すのにびったりのお店。クラシックの響きも穏やかで、江崎にと

んが敷かれていた。伊吹さんが江崎の言葉に「彩菜たちが草原に座って、星を見上げるイメージ」を重ね合わせたからだという。伊吹さんいわく、「大人がくつろいで話すのにびったりのお店。クラシックの響きも穏やかで、江崎にと



## カレーの発音で母子がけんか

■インド料理店「新宿ボンベイ」

「お母さん……カレー、カレー、ってそんなに大声で言うなよ」「なんで?」「その言い方だと、東京では魚のカレイなんだよ」

## にぎやか店内 声大きく

新宿駅近くのインド料理店「新宿ボンベイ」。ディナータイムのにぎわいの中、話をしようと思ったら声も大きくなる。バスの乗客、真由美が大学進学で上京する息子の仁志と過ごす最後の夜に入ったインドカレーの店のモデルだ。



インド料理店「新宿ボンベイ」。窯で焼いたナンはモチリした食感。なお作中のレーズン入りカレーは、このメニューではないそうだ  
■新宿ボンベイ  
03(3348)3724

この母子、道中でたあいがない言い争いばかりする。この店でもそう。周囲はネオンきらめく新宿のビル街。製菓工場で働き、女手ひとつで一人息子を東京の私立大学に送り出す真由美は、「街の勢いに負けまい」とつい言いすぎ、息子は

不機嫌になる。店を出た真由美は帰りのバスに乗るために池袋へ向かう。「今だったら駅前のが」と伊吹さん。母子が大勢の人にもまれるのは、夜の山手線だという。

夜行バスは最終の新幹線よりも、乗る人と見送る人が遅くまで一緒にいられた。夕食後、乗車までの時間で東京スカイツリーのひとつも見に行ける。天望デッキは長蛇の列だった。大人2060円。真由美たちは下から眺めただけだったかもしれないし、奮発してエレベーターに乗ったかもしれない。星を、地面に転写したような夜景だった。